

# 貫く平和運動を



さわむら・あきよ 1989年生まれ。愛知県平和委員会青年・学生部長、日本平和委員会青年委員会副責任者。名古屋市在住。

## 澤村 曉世さん 愛知県平和委員会 青年・学生部長

若者たちの中に、憲法を守る世論と運動をどう広げていくのか——安倍政権による改憲を阻止するために避けては通れないこのテーマについて、神戸女学院大学教授の石川康宏さんと愛知県平和委員会青年・学生部長の澤村曉世さんが語り合いました。

澤村 愛知県平和委員会青年・学生部長は毎年5月3日の憲法記念日に、名古屋駅前では若者100人から憲法についてのアンケートを集めています。そこで感じるのは、憲法について知らない若者が本当に多いということです。改憲に賛成と答えた人にもその理由を聞くと、「お給料を上げてほしいから」などと憲法と関係のない答えが返ってくることも少なくありません。

石川 うちの大学でも、そもそも憲法とは何か、自分の暮らしとどう関わっているのか知らない学生が圧倒的です。そういう人に「いま改憲の危機なんです」と訴えても、入り口からかみ合いません。

僕たちベトナム世代と今の若い世代では、育った環境が大きく違います。僕が大学に入ったのはベトナム戦争が終

わる年で、子どもはもうこのうありました。何となく子どもに参加しているうちに、政治や社会のことが見えてくる社会環境があったのです。

でも、今の若者は、政治や

澤村 40代の先輩たちが話

を聞くと、彼らが学生の時は、会議が終わった後は必ずみんな飲みに行き、お店が閉まるまで語り合っていたのです。それで、「今の若い人は何で飲みに行かないの」とよく言われます。

でも、私たちがするん

飲みに行くお金もないし、次の日も朝から授業や仕事があるのに向て飲みに行かないといけないのかと思います。価値観の違いを感じます。それ

澤村 私の周りの友人たちも、みんな自分の生活で精一杯で、私が平和運動をやっていることを知っていても、自分が参加しようとは思わないと言います。

ある友人は、付き合っている人が非正規雇用だという理由で、親に交際を反対されました。今の日本には、好きな人と一緒にいたいという当たり前の願いすらかなえられない状況があります。まずは自分の前の自分の生活や将来をどうにかしなければいけない状況なのに、憲法や平和のことまで考える暇はないという人がいても不思議ではありません。

澤村 安部政権は、国民を困難な状況におとしめながら、目の前に餌をぶら下げて釣ろうとしているのがうまいですね。アベノミクスがそうです。我々研究者に対する軍事

社会運動にまったく触れる経験のないまま大人になるのが普通です。しかも、子どもの頃から受験競争を強要され、そのストレスからいじめが起きたり、わが身を守る苦労があったり、対人関係でも腹を割って話すという経験がなかなか持てない。こういう環境では、憲法は学校の勉強で暗記する対象にはなっても、自分のものにはなかなかありません。

ベトナム世代は、育ってきた環境の違いによりよく理解しないと、若い人への働きかけは空振りになる可能性が高いです。

共同への誘導もそうです。そうやって餌を釣って理想や理念を語らせない。この「目の前主義」から若者たちを引っ張り出して、いくかというのは大きな課題です。

澤村 平和委員会は、全国の若者に呼びかけて「ピースエッジ」という合宿企画をやっています。7~8人で班をつくり、3日間じっくり時間をかけてグループワークをします。テーマは「平和について」なんですが、自然と普段の学校や仕事のことで身の上話になっていきます。

終わった後の感想文に「班のみんなが話ができるとか、たとえ書く人が本当に多くて、そういう話をする機会が日常の中にいかにないかということがうかがえます。話をするというのは、何も特別なこと

一杯で、私が平和運動をやっていることを知っていても、自分が参加しようとは思わないと言います。

ある友人は、付き合っている人が非正規雇用だという理由で、親に交際を反対されました。今の日本には、好きな人と一緒にいたいという当たり前の願いすらかなえられない状況があります。まずは自分の前の自分の生活や将来をどうにかしなければいけない状況なのに、憲法や平和のことまで考える暇はないという人がいても不思議ではありません。

澤村 安部政権は、国民を困難な状況におとしめながら、目の前に餌をぶら下げて釣ろうとしているのがうまいですね。アベノミクスがそうです。我々研究者に対する軍事

ではないのに、そんな時間すら奪われているのです。

石川 時間がないことに加えて、そういう文化がどこかで切られている。僕の実感だと、70年代後半以降と90年代に日本社会はかなり変わったという気がします。

僕が大学に入学した頃は、全国にまだ革新自治体があり、国会でも社会党と共産党がかなりの議席を持っていた。しかし、70年代の後半から社共の共闘が断たれ、憲法を生かした社会づくりをめざす運動に強いブレーキがかけられます。

そして、1991年の1連の崩壊で、社会主義が駄目だといっただけでなく社会を変えようという運動全体が幻想なんだという攻撃がかけられ、新自由主義が急速に広まっていきます。構造改革路線で労働法制の規制緩和などが進められ、若者が読む週刊誌などで「勝ち組／負け組」論が展開されます。こうやって社会が分断され、人々がそれぞれ作り上げてきたネットワークが破壊されていきました。社会運動にも、大きな世代的断絶が生まれました。その一

回切られて薄くなっている部分をもっと一度双方から紡いで、運動を立て直さないと、いけないの今だと思います。

澤村 去年、シールズが出てきてメディアにもたくさん登場したことで、若い世代の中でも少し政治の話をしやすくなったように感じます。しかも、安倍内閣選が成立して終わりではなく、その後も参議院選挙に向けて「野党は共闘」「選挙に行こう」と運動を継続し、若者が政治参加することで社会を変えていくという手本を示してくれました。この流れが、これからもっと広がっていくことを期待しています。

石川 70年代後半から私たちの運動が次の世代をつくりづらくなって、みんな段々と高齢化して「若者がいない」と言っていた中で、シールズを始め頑張る若者たちが出てきてくれました。でも、中間の世代がすっぽり抜けているので、60歳以上のベトナムが20歳の若者と直接コミュニケーションをとりながら、一緒に運動をやらなければいけない状況です。これは相当、無理がある(笑)。

## 若者リアルに理解して 石川

澤村 石川先生が学生やシールズの若者たちと接する上で気づけていることはありますか。

石川 まずは、話を聞こうということです。おじさんやおばさんが「私たちは意見を知らない君たちは勉強不足。だが

ら教えてあげる」といって上から自慢で接すれば、うしろがられるだけで距離は縮まりません。自分が伝えたいことを一方的に話すのではなく、相手の理解することや本意を引き出すことにエネルギーを割いているつもりです。

澤村 確かに、ベトナムの

人たちが飲みに行き、「昔話」が始まってしまえば永遠と続いてしまう(笑)。こちらが活動の悩みを相談したくても、口を挟む隙もないまま、一方的に話されてお開きになってしまうことも少なくありません。

あと、遊びが中心のイブ

トを企画するの、何で遊びばかりなのか。もっと学習しなさい」とか。ベトナムの人たちは、企画で偉い人の講演を聴いて、終了後の打ち上げで楽しく交流するというスタイルが定着しているみたいです。

(3面につづく)

新春対談  
若者×憲法

個人の尊重

憲法  
13条

澤村 うちの会員から「平和委員会が居場所になてい」と言われて、ハッとすることがあります。組織に入て自分が活躍できる場があることが、その人の支えになっているのだと思いました。

私たちが世代は、学校では集団として扱われ、就職活動でもみんなと連立を組むことを言ったら落とされてしまつたか、「社会運動をしていると就職できない」と言われたりする中で育ってきました。だからこそ、自分が言いたいことを書いて、それを受け止めて

もらえる場が必要とされているのだと思います。石川 一方で、今の若い人たちは「組織に入ると縛られる」という抵抗感も持っていますね。

今、多くの市民が政治参加の自発的な意識を持って立ち上がり、市民連合も「個人の尊厳を守る政治の実現」と言っている時に、私たちもその状況に合わせ、組織のあり方を考える必要があります。

澤村 一人ひとりの個人を大切にしない社会になっていくからこそ、本当に個人を大切にする組織が求められているのだと思います。

石川 一人ひとりの個人を大切にしない社会になっていくからこそ、本当に個人を大切にする組織が求められているのだと思います。

澤村 一人ひとりの個人を大切にしない社会になっていくからこそ、本当に個人を大切にする組織が求められているのだと思います。

石川 一人ひとりの個人を大切にしない社会になっていくからこそ、本当に個人を大切にする組織が求められているのだと思います。

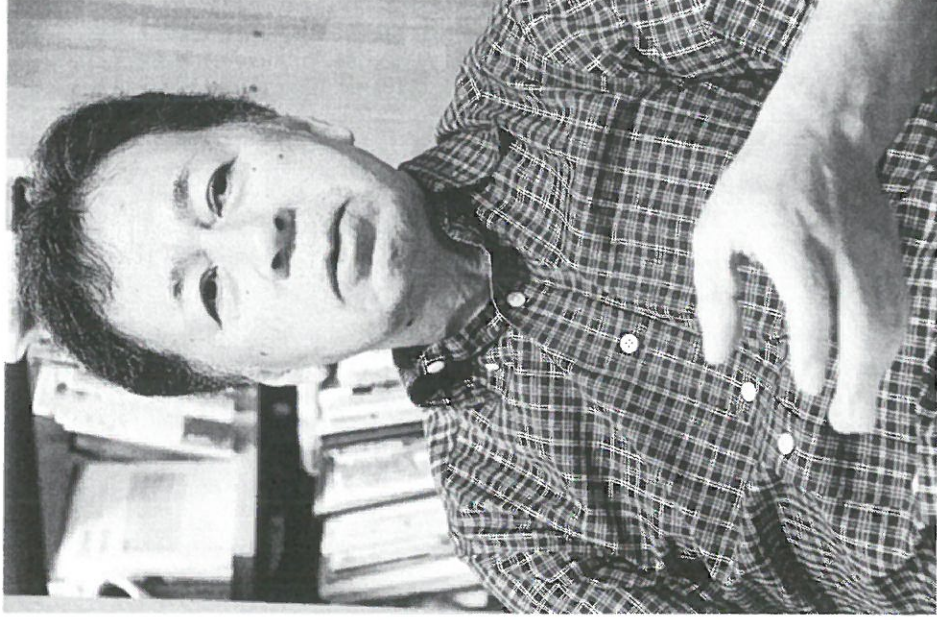
石川 若い人たちが置かれている状況をリアルに知っていれば、なぜ選挙の企画が大

切なのかかわかると思えます。心を開き合う入口づくりの重要性がわからないと、遊んでばかりいないで、もっと

学習をしない」となる(笑)。若い人たちが、けして現状に満足しているわけでもありません。もっと暮らしが楽

になってほしいと思っています。だからこそ、まずは話を聞くのが大事です。時間をかけてよく話を聞いて信頼関係ができてくると、最初は強がって殻を固く持っていた人も、少しずつ本音を話すようになってきます。

石川康宏さん 神戸女学院大学 教授



いしかわ・やすひろ 1957年生まれ。神戸女学院大学教授。憲法が輝く兵庫県政をつくる会代表幹事。全国革新懇代表世話人。兵庫県西宮市在住。

変えられる実感を継ぐ石川



万全の備えで暴走阻止

日本平和委員会代表理事 内藤 功

全国の平和委員会会員、読者の皆さんへ、2017年の新年にあたりご挨拶を申し上げます。各地の闘いで、市民の共同や野党共闘の要として大事な役割を果たされている皆さんに、心からの敬意を表します。

安倍政権は、戦争する国を志向し、虚構の多数議席をよりどころに、司法部を内閣の弁護人化し、総理の解散権を私物のようにもたせ、解散の好機を模索し、憲法改憲の野望に固執しています。改憲国民投票

での過半数をねらって、草の根で行動する日本会議、維新の会などの動きも軽視できません。新しい年は、今までの活動の貴重な到達点を確認し、いっそう力と知恵を集めて、安倍政権の暴走を阻止し退陣に追い込むべきです。彼らの暴走を必ず覆すに足る、万全の備えを構築しましょう。

たとえば、「国民改憲草案」の学習にあつても、一歩踏み込んで、彼らの暴走を妨げる場を打ち破る闘い、憲法改憲の野望に固執しています。改憲国民投票

います。大言のことはなく、動によって実際に社会を変えてきたのを知っているわけだから、その新しい芽を大切にしていきたい。

澤村 愛知県内で新たに運動に参加した人に話を聞くと、3・11(東日本大震災／福島第一原発事故)がきっかけになったという人がたくさんいます。「あれだけの大事故があつたにもかかわらず、原発を再稼働する日本って何なのだろう」と疑問を抱き、初めてデモや集会に参加した。そういう少しずつの

石川 世界では、トランプ氏が米大統領選挙で当選したり、ヨーロッパの一部の国で極右勢力が台頭する一方、自らを「民主社会主義者」と呼ぶサントス氏が予想以上に激戦したり、ヨーロッパでも左派がもう一度政治の前面

に出る動きがあります。右に行くにせよ、左に行くにせよ、現状はまずいという認識は共有されています。背景には、ソ連崩壊後に米国主導で進められてきた経済と軍事のグローバル化、冷戦がもたらした世界の歪みがあり、その決算が求められています。それは、排外主義など非常に悪い方向に向かう可能性もあるし、逆に良い方向に向かう可能性も含んでいます。医学の用語で「シラミ」とは、単なる危機ではなく、良

新しい芽もつと大きく 澤村

澤村 愛知県内で新たに運動に参加した人に話を聞くと、3・11(東日本大震災／福島第一原発事故)がきっかけになったという人がたくさんいます。「あれだけの大事故があつたにもかかわらず、原発を再稼働する日本って何なのだろう」と疑問を抱き、初めてデモや集会に参加した。そういう少しずつの

石川 世界では、トランプ氏が米大統領選挙で当選したり、ヨーロッパの一部の国で極右勢力が台頭する一方、自らを「民主社会主義者」と呼ぶサントス氏が予想以上に激戦したり、ヨーロッパでも左派がもう一度政治の前面

に出る動きがあります。右に行くにせよ、左に行くにせよ、現状はまずいという認識は共有されています。背景には、ソ連崩壊後に米国主導で進められてきた経済と軍事のグローバル化、冷戦がもたらした世界の歪みがあり、その決算が求められています。それは、排外主義など非常に悪い方向に向かう可能性もあるし、逆に良い方向に向かう可能性も含んでいます。医学の用語で「シラミ」とは、単なる危機ではなく、良

い方向への変化と悪い方向への変化の分岐点という意味があります。日本の政治にも、国会で3分の2の議席以上を押さえられているという状況の一方で、それを打開するための市民と野党の共闘という新しい可能性も生まれています。もしどちらが勝つていけば、日本は憲法を生かした社会にかなり大きく進まざるを得ないでしょう。そういう前向きな変化の可能性を現実のものとするために、お互いに頑張っていきたいですね。